

文子

○「今日からは新米ぞね」と仏壇へ

○栗の在り処誰にも教えず叔父は逝く

「ごめんね」とりんごの下にメモのあり



酔花

○新米と太き筆文字城下市
お日様を抱く山峡今年米
老猫の膝より滑り流れ星

千代

農子

○各々に帰って行きぬ星月夜

○新米の炊けた匂いに目覚めけり

ためらいの籠いっばいの間引き菜や

○金木犀ふつと香りて過去にいる
○新米の炊きあがり待つ死者生者
寿命かとテレビ叩くについて消え

みどり

富江

新米に黒胡麻バラリ今朝の幸

弟よ兄に逢えたか秋の星

秋うらら降車ボタンを押し忘れ

新米や羽釜も竈も倉もなし
クレインの腕にたたまれて秋の星
鴉一羽見晴らし枝の猛りかな

秀美

丞子

ふるさとの杉の秀に止む流れ星

さりげなく山の新米竹ザルに

秋時雨風呂の軒下やどり鳥

○秋の灯やひとりの家がまた一つ
一日を蝶遊ばせて藤袴
竜胆や悲しくも無く出る涙

志津子

一枝

瑞枝

○新米のまずは特大にぎりめし

○星飛んでサーカス団はどこ行った

銀漢の霞むロシアとウクライナ

○スマホより産声聞こゆ秋うらら
○どの顔も水欲しさうな菊人形
秋夕焼け川面に写し友を恋ふ

富子

郁子

○ハモろうと伸びて風呼ぶ秋桜

新米は嫁のふる里父母の味

生きてこそこの美しき星月夜

○瞬いてあれは夫かも明けの星
ぬくぬくの精米したて日々遠く
寡婦なれば時に矜持の出番あり



味元 昭次 作品



土讃線新米車掌爽やかに
手を入れて人の温みや今年米
善人や新米どかと置きゆきて

★次回市民句会

【開催日時】

令和五年十一月二十二日(水)

午後一時十五分〜午後四時(予定)

【場所】

オーテピア4階 研修室

どなたでも自由にご参加いただけます